行灯の昼

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
行灯の昼

【Ｎコード】
Ｎ２３９４Ｙ

【作者名】
蒲公英

【あらすじ】
株式会社エア・トラッド・ジャパン、よっつめのお話です。
地味で口下手、見た目も凡庸。万事につけて目立たない男の一人称のお話。フツーの人たちがフツーの生活の中で、ゆったりと心を通わせる話になると、いいなあ。

＊Ｒ－１５は保険なので、そんなシーンが出てくるかどうか、まだ未定。

1

「長谷部君、肩揉んでぇ」
デスクの上に腕を投げ出す水元佑子、三十四歳経理部総合職。
彼女は二十七歳で一度姓が変わり、二十九歳の時に元の姓に戻った。
バツイチ子ナシ、そして俺の同期だ。
俺が社内で唯一、気安く口を利く女でもある。
三十四にもなって、女と喋るのに緊張するのは、俺が慣れていないせいだ。
俺は口下手だ。ツラも女ウケしない。
二年後輩の山口みたいに、ツラも良ければ弁も立ち、上司の覚えがめでたいヤツと違うのだ。

「なんで、水元の肩を揉まなきゃなんないの？」
「長谷部君の芋虫みたいな指が、気持ちいいの」
芋虫ねえ……確かに、俺の指は太い。
「新しい派遣の子が、なかなか使えなくってえ。坂本さん、よく働いたんだけどなあ」
「ああ、なんだかパニック起こしてたって子」
水元の首から肩にかけて、揉み解してやる。
「いててっ！もっと柔らかく揉んでよぅ」
「力なんか入れてないぞ。血行悪いな、ババァみてえ」
「花の独身よ、私」
「まったく……祝儀、返せ」
「ああ、その節は有難う存じました。もう使っちゃったよーん」

残業の薄暗くなった社内で、経理部にも水元しか残ってない。
俺の所属する設備施工部も、もう空だ。
「およ。ラブシーンかと思ったら、長谷部さんと水元さんかぁ」

開発営業部のお調子者、萩原がパーテーションの隙間から顔を出した。
「あら、長谷部君と愛の語らいの最中よ。邪魔しないで」
水元が軽やかに返すのを、羨ましく聞いていた。
「長谷部さんが愛の語らいっすか。誠意ありそうっすねえ」
ほらね、俺の評価なんて、そんなもんだ。

今は山口の嫁さんになってしまっている野口さん。
彼女は入社当時、立てば芍薬とはいかなくても、タンポポよりはずいぶん美しかった。
俺より一年後に入ってきた彼女に、ずいぶんときめいたこともあった。
彼女の頭の回転の速さとか、華やかな雰囲気に気圧されて、誘うこともできなかったけど。
あれだけ仕事ができるのに、短大卒だってだけで一般職でサポート業務しかさせない、会社のシステムってなんだかヘンだ。
俺がそう言ったって何にも変わらないから、誰にも言わないけどね。

いつの間にか「若手の飲み会」に誘われなくなった俺は、先日一度だけ、山口と水元に誘われて、酒の席に顔を出した。
「長谷部さんが来るなんて、珍しーい」
そう言って歓迎してくれた後輩たちは、時間が過ぎるにしたがって、俺の入っていけないノリの話題に移り、お開きになる頃には、気を遣った水元さんが隣に座っているだけだった。
仕方ない。喋るのは苦手だし、今風の話題にもついていけないんだから、後輩たちが悪いわけじゃない。
気を遣わせたくないから、やっぱり「若手の飲み会」は、誘われてもパスしようと思うだけだ。

2

「長谷部さん。設備施工部、今忙しいですか」
「また小商いの工事とか言わないよね？」
萩原の俺への問いに、隣の席が、即答する。
俺の所属する部署は、基本的にビル物件の空調設備の設計施工を行うので、店舗や住宅は扱わない。
「物件のエリアがダブってて、エリア外の工事店にやらせると、後でメンテ契約の時、揉める惧れが……」
その物件に関しては、開発営業部の津田から、先手回しのメールをもらっていた。
「そこを揉めないようにするのが、営業の手腕だろ」
「それが難しい工事店だから、頭下げに来たんですよう」

「山口に相談しろよ。得意だったろ、煙に巻くの」
「他部署だし、現場から離れちゃってるし」
俺より何年か先に入社した生田さんは、とにかく仕事を増やしたくないタイプの人だ。
工事店に仕事をまわすより、元請けが直接工事した方が利益率が高いのは知っている癖に、少し手が空いていても、利益が大きい仕事だけをメインに、小商いをしたがらない。
「いいよ、個人商店だろ？予算出てんのか」
気の毒な萩原を解放してやりたくて、生田さんの言葉を遮った。
多分部内で調整しても、うまい業者が探せなくて、こっちに来たのだ。
物件は今、混んでいない。予定外の工事が一日くらい入っても、俺的にはまったく問題ないタイミングだった。

「長谷部、安請け合いすんなよ。まず申請書あげてもらわないと」

「口頭で答えてから申請書なんて、よくある流れじゃないですか。萩原、とりあえず図面送って」
嬉しそうに自分のデスクに向かう萩原の後姿に、生田さんは舌打ちした。
「他部署にどうにかしてもらおうってのが、気に食わねえんだよ。長谷部は甘いな」
「こっちにも利益は落ちるじゃないですか。それに萩原、最近仕事にノリはじめたとこだし」
「本人の好不調で、請けたり請けなかったりすんのか、お前は」
イヤガラセのようにマウスをポンポン叩いてみせる生田さんに、とりあえず頭を下げておく。
萩原は今年に入ってから、仕事への姿勢が変わってきてるし、そういうヤツはこっちも応援したいんだけど。

「長谷部さん。萩原の無理を聞いてくれたみたいで、ありがとうございました」
一人前の中堅営業社員になった津田が、パーテーションの上から顔を出した。
今でこそ萩原の指導担当だけれど、こいつもいろいろやらかしたクチだから、必ず後輩のフォローに入る。
仕事ってのは失敗してナンボだから、実はやらかしたヤツほど成長が大きい。
「津田ぁ。こっちの仕事増やすように指示したのは、おまえか」
生田さんが、文句言う気満々で噛み付く。
「大丈夫ですよ。俺が行きますから、生田さんには手間取らせません」

俺のとりなしがますます気に食わなかったのか、生田さんは自分のデスクの前に、どん、と座る。
「長谷部みたいなお人好しに、直接話を持ってったら、忙しくて

も請けるのわかってんだろうが。ちゃんと後輩の指導しろよ」
「いや、俺も仕事が詰まってたら断りますって。大丈夫だ。行っていいよ、津田」
手を合わせる津田に合図して、場を下がらせる。
荒れ模様の生田さんの説教を聞くのは、俺だけで充分だ。

「は・せ・べ・く・ん」
給湯室でカップ麺に湯を入れていると、後ろから水元の声がした。
「今日も残業？頑張るねえ」
「いや、これ食ったら帰るけど。家に帰っても誰も居ないし、腹減ったしな」
「生田さんに、またごちゃごちゃ言われてたね」
「仕方ないね。考え方も違うし、俺はやっぱり甘いから」
水元はくすっと笑った。
「だからみんな、長谷部君を頼りにするんだよね。人が好いのは長所だよ。じゃあ、お疲れ様ー」
給湯室から洗面所に向かった水元は、化粧でも直して帰るんだろうか。
頼りにされてるのと甘く見られてるのは、違うぞ。
本当は生田さんに言い返したいことは、山ほどあったんだ。

3

「長谷部さんって、糸川さんと飲みに行ったりしてるんですか？」
経理の派遣社員の下田さんは、なんていうかイマドキちゃんで、仕事よりもプライベート優先の雰囲気を漂わせてる。
小さな可愛い顔と、明るい色に染めた髪と、短いスカートだ。
大体ろくすっぽ口を利いたことのない俺に、何故こんな風に話しかけたかって言うと、サービス部の新人の糸川が俺に懐いてるからだ、と見当がつく程度。
利害関係がわかりやすくて、素直っちゃ素直なんだな。

「たまにはね。糸川も今、忙しいから」
「どんな話するんですかぁ？今度、連れてってくださいよぉ」
他の男目当てに気がつかなくて、気がついたら自分が除け者になっていたことは、何度もある。
座を取り持つほどの話術は心得てないから、俺以外で盛り上がってる話を耳にしながら、ただ同じテーブルに向かってるだけで、結構消耗する。
好意を持ちつつある女の子に、そんなことをされると、結構へこむんだな。
だけど悟りきった傍観者になるほど、俺もまだ諦めちゃいないわけさ。

三十四にもなれば、それ相応に家庭なんか持っちゃって、子供の一人二人ってのは、俺が学生の頃抱いてたイメージなんだけど、今の自分を鑑みてみれば、それはあんまりリアルな空想じゃなかったらしい。
そりゃ、彼女がいた時代はあった。
一番最近だと五年くらい前に、やけに「結婚したら」って言葉の出

る女の子がいたな。
俺がそこまで盛り上がる前に、とっとと他の男を見つけて結婚しやがったけど。
「あなたは、結論が見えてるんだか見えてないんだか、わかんない」
「もっとじっくり考えようよ」って言ったときの、返事だった。
つまり、結婚が見えてれば待てるけど、これから考えるんじゃ話にならんってこと、だったらしい。

山口と野口さんが、一緒に会社を出て行く。
あんまり生活の見えないカップルだけど、これから一緒にメシ作ったり、洗濯したりすんのかな。いいなあ。
ドラマみたいな恋愛や、分不相応なロマンスは、期待したくたってできない。
ただ俺みたいな地味な男を、気に入ってくれる子がいれば、大切にしたいとは思う。
実際のところ、職場以外で女の子と話すことなんてないし、職場の女の子の眼中にも、入ってないけど。
つまり、お見合いシステムみたいなところに金を落とすか、このままジジイになっていくか、なのかも知れない。
両方とも、嬉しくはない。

4

「あ、長谷部さんも、メシ行きません？」
気楽に声をかけられたので、てっきり山口と津田だけかと思ったら、野口さんと水元が一緒だった。
同期の水元を呼び捨てなのに、年下の野口さんにだけ敬称をつけるってのもおかしいけど、距離感が違う。
多分それが、俺の融通の利かなさの証明のようなものなのだ。

居酒屋に腰を据え、身体なりに大食らいの津田が（こいつの奥さんは、かなり小柄だ）せっせと料理を口に運ぶ。
山口は津田をからかって遊び、野口さんが時々それに便乗する。
水元は若干大人らしい態度で、でも場から浮き上がらずに話に加わっている。
俺は、浮き上がっていないか？
確かに話しやすい面子で、野口さんにも昔ほど緊張はしない。
「長谷部君、梅割り？」
あまり酒の飲めない水元が、世話を焼いてくれる。

ノリ良く話せないことに、卑屈になる必要はないと、わかってはいる。
俺はこのペースでしか他人と付き合えないし、生まれ持っての外観を挿げ替えることはできない。
今風じゃないかも知れないけど、他人の迷惑にはならないわけだし、社会生活にも不自由はない。
ただ時々ふっと、山口みたいに喋れればいいな、とか、萩原みたいに女の子と気軽に口が利ければ、とか思う。
他人を羨むのに、　努力とか理屈はない。

「下田さんに飲みに誘われなかった？」
水元に話を振られ、ぼうっとした頭を会話に切り替える。
「糸川と一緒にって話？」
水元は曖昧な顔をした。
「長谷部さんにふられたぁって言ってたよ」
直接声をかけたのは俺でも、目当てはどう考えたって違うだろ。
「最近サービスは最近忙しいみたいだからね」

「ああ、あの子、結婚相手探すのに派遣やってる、みたいなところがあるからね」
山口が言葉を挟み、野口さんが同意する。
「仕事はちゃんとしてるんなら、問題ないんじゃない？」
津田がそう言うと、水元は箸でテーブルをとんとんと叩いた。
「ミスだらけなのよお」
「まだ入ってきて、二ヶ月だろ。慣れないんじゃないか？」
俺が返事をすると、山口は俺の肩をぽん、と叩いた。
「長谷部さんって、やっぱり優しいよなあ。先週、大変だったんじゃない？」

5

新規の客先の資産状況を調べて、取引の前提として信用限度額を設定するのは、多分どこの会社でも経理の仕事だと思う。
まあ2桁万円ならば、資産状況の質問状に記入してもらってお終いだし、逆に大物件を扱っているような会社は、公開している。
問題は、3桁前半の取引の見込みの場合だ。
大抵の場合は興信所に情報があるのでＯＫなのだが、直接の契約が子会社だったりすると、わけのわからないことになる。
そして今回の場合は、ちょっと小うるさい客だった。
発行してもらった発注書に書かれた会社名は、興信所にデータがなかった。
そこで税理士が発行した決算報告書の一部をコピーしてもらうことになるのだが、それの連絡をしたのが、下田さんだ。
生田さんの物件だから、本来なら生田さんが客先に連絡するべきところだったが、面倒がって経理に丸投げしたのだ。

―会社の決まりなので、御社の決算報告書をＦＡＸしてください。
――そんなものを何に使うの？
―御社の資産状況によって、信用限度額を決めるんです。
――契約するんだから、ちゃんと払うに決まってるでしょう。
―でも、資産を確認しないと、売れない決まりになってるんです。
――相手の財布見て、商売するの？
―だって、赤字になってる会社は払えませんよね。

どうも、こんなやりとりだったらしい。
資産状況を見せたくない会社ってのもどうかと思うけど、我儘な客は珍しくない。
これからビルを建てようってんで、すっかり殿様気分の客だって多

いのだ。
それ相手に「金が払える力があるかどうかの確認だ」と言ってしまうのは、あからさまにまずい。
まして「赤字になってる会社は」なんて、言語道断な話だ。
客先はもう、発注を取り消すなんて騒いでるし、こっちはこっちで、メインの担当の生田さんが経理に怒鳴り込むしで、大騒ぎになった。

「慣れない女の子だから」
ちょうど萩原の現場に出ていた俺は、ことの顛末がわからなくて、無難な言葉で生田さんの怒りを鎮めようとした。
「そうだ。お前が余計な仕事を入れたから、こっちの時間がなくなったんだ」
生田さんに「詫びてこい」と押し付けられた俺と、経理の課長が雁首揃えて客先に菓子折り付で失言を侘びに行き、社長宅に無料でルームエアコンを1台進呈して、やっと話が収まったのだ。
経理の課長が会社に帰ったとき、下田さんは明るく「お疲れさまー」と言ったらしい。
言葉遣いに注意してくれと諭したら、「ああいう時の対応の仕方を、教えてもらっていません」と、悪びれもしなかったと、水元が愚痴交じりに言っていた。
「専門職の派遣だから、プロの事務屋として相手に気を配るっていうのは、当然できると思ってたのよねえ」
当然のように俺に肩を揉ませながら、水元は溜息をつく。
溜息をつくのは、完全とばっちりの俺の方だとは思うんだけど。
「ま、無事に物件契約まで済んだし、良かったよ」
「長谷部君は、大きいわよねえ」
いや、腹が立つことは立ってるんだけどさ。
いろいろ複合して腹を立てたから、どこから文句を言っていいのか、わからないだけだ。

それが先週の顛末で、その翌日、経理の課長にこっぴどく叱られた下田さんは、沈んだ顔で謝りに来た。

「もう済んじゃったことだから、次から気をつけてね」

そう言って、終わりにした記憶がある。

6

「なんかねー、大人のホーヨーリョクとか言ってたよー」
水元が俺の顔を見て言う。
「誰が、誰を？」
「やーだ。下田さんが長谷部君を、よ。生田さんにぎゃあぎゃあ怒られて、派遣元にまで苦情が行って、自分はまずいことをしたらしいって自覚したとこで、なんか優しい事言ったんじゃないの？」
「いや、特に言ってないと思うけど」
あれが優しいと思えるんなら、ひどい誤解だ。
俺は話を長引かせたくなかっただけだし、彼女自体が派遣解除になっても、実はなんとも思わないと思う。

「長谷部さんは確かに、安心感ありますよね」
ストレートな津田は、お世辞は言えないから、外からはそう見えているのかも知れない。
「ああ、そうそう。困った時の長谷部さん頼み、とか、あるもんなあ」
山口まで合わせる。
同じ会社に困ったヤツが居れば、助けてやりたいと思うのは、俺が甘いんだろうか。
「長谷部君、愛されてるねえ」
水元が笑う。
「おっさんになりかけた男に愛されても、大して嬉しくない」

「あたし、不思議なのよねえ」
野口さんが唐突に俺に向かって言った。
「長谷部さんって、優しいし真面目だし、結婚するには良いタイプなのに、なんで独身なの？女の子の好み、うるさいの？」

顔面と頭の良い男と結婚した人に、そんなこと言われたって困る。
そう言ってくれるなら、野口さんが俺に惚れてくれたら文句はなかったのに。
「派手にアピールする部分が少ないから、気付かれ難いんじゃない？」
水元はウーロン茶なので、結構冷静だ。

俺が何故結婚してないのかの分析なんて、要らないんだってば。
考えてみれば、山口も津田も社内恋愛で、こいつらこそ社外でいくらでも恋愛できそうなのに、近いところで探したもんだ。
水元の離婚した相手は、確か取引先の男だった。
梅割の梅を焼酎の中で潰してみる。
明日の休みは、多分テレビ見て、終わりだ。

1

「生田ぁ。流通管理が、与信オーバーで売上計上できないって言ってるぞぉ」
「いや、一昨日の現金入金で、出荷できる筈だけど。入金してくれてないのかなあ」
「経理が入金処理忘れてんじゃないかぁ？水元さんに聞いてみろよ」
こんなやりとりの後に、名前を呼ばれるのは俺だ。
水元に内線で確認を頼んだ後、自分の仕事のためにモニタと睨めっこしていた。

しばらくしたら、パーテーションの影から、水元がひょっこり顔を出した。
「さっき連絡貰った物件、誰の？」
生田さんの物件だと教えると、ちょっと眉間に皺を寄せてから、覚悟を決めたように中に入って来る。
そして、入金処理ミスを報告し始めた。
「何やってんだよ！今日の出荷があるから、現金入金で頼んだのに！経理がいい加減な仕事して、現場に皺寄せが来るんじゃ、会社はガタガタじゃねえか！」
ここぞとばかりに言い募る生田さんに、口答えせずに頭を下げる水元は、痛々しい。
大体ベテランの水元が、そんな初歩的なミスをするわけがない……と、思ったのは、俺だけって訳でもない。

「まあまあ、水元さんにそんなに怒ったって仕方ないだろ。本人が処理したわけじゃないだろうし」
課長が割って入らなければ、生田さんの文句は延々続いたろう。
「でしょ？派遣さんが処理したんじゃないの？」

「でも、私が責任者ですから。任せないで、最終チェックすれば良かったんです」
最敬礼する水元に、生田さんがまだ噛み付いた。
「処理した当人に連れて来いよ！派遣だからって無責任なことすんなって言ってやるから！」
「そこまでにしとけよ。水元さんが頭下げてる意味、なくなるだろ」

何度もぺこぺこ頭を下げて、水元は自分のブースに戻っていった。
間接部門は地味なのに、「間違いがなくて当然」と思われやすい。
実際、経理が間違いだらけじゃ、会社は立ち行かないけど。
俺も現場じゃあ責任者だし（っていっても、設備施工部は平均年齢が高い）、他部署の若手を指導する立場にはいるけど、派遣社員を上手に使えるかっていうと、ちょっと自信はない。
まだぶつくさ言いながら、流通がＯＫになった生田さんは安全帯をがちゃがちゃ言わせて出掛けて行った。

「長谷部さん。生田さん、すっごく怖かったですね」
給湯室でマグにコーヒーを入れたとき、後ろから下田さんに話しかけられた。
「あれ、私が入金先のマスタを間違えて入力したんです。水元さんに悪いことしちゃって」
ああやっぱり、と思ったのは、今まであんなミスはなかったからだ。
「長谷部さんの物件なら、自分で謝りに行こうと思ったんですけど、生田さんじゃ怖いんだもん」
水元なら怖いと思わないとでも、言うんだろうか。

無言で給湯室を出ようとしたら、もう一度声を掛けられた。
「今週の飲み会、長谷部さんも参加するんですよね？」
「わかんないなあ。多分、出ないと思うけど」

「何でですかあ?忙しくても来てくださいよ。私、長谷部さんとお話したい」
調子良いこと言われたって、ずいぶん懲りてるんだってば。
それが自分の交友層を薄くしてるのは、わかってるけど。

2

金曜日の晩、帰ろうとしたところで、サービス部の糸川から声をかけられた。
「長谷部さんも行くんですよね？一緒に行きましょうよ」
「飲み会？俺、参加って言ってないけど」
そこに女の子たちが通り掛った。
仕事が終わって遊びに出ようとする女の子たちは、やけに華やかだ。
「糸川君も長谷部さんも参加ですよねえ。先に行ってまーす」
「俺、参加になってる？」
驚いて聞き返すと、下田さんがにこにこしていた。

「わかんないって言ってたから、私が保留にしときました。お仕事終わったんなら、参加できますよね？」
わかんないってのは、婉曲な不参加表示のつもりだったんだけど。
「ちゃんと来てくださいね。私、長谷部さんと飲んだことないんですから」
そう言っただけで、女の子の集団の中に戻ってしまったのを、呆然と見送る。

参加になっちゃってるんなら、行かないのは幹事に申し訳ない。
糸川が待っていてくれるので、作業着から着替えることにする。
とは言っても、俺も糸川も営業みたいにスーツを着ているわけじゃなくて、オックスフォードシャツにスラックスだけど。
更衣室から出たら、今度は水元がそこの前を通るところだった。
「あれ？長谷部君も参加なんて、珍しいね。一緒に行くから、ちょっと待ってて」
そう言って女子更衣室の中に消えて、すぐに出てきた。
「今日のオーバーサーティは、私だけかと思ってたら、ちょっと心

強くなった」
「え？あとみんな二十代？」
「そうよぉ。山口夫妻ははじめから不参加だし、津田君は打ち合わせ入っちゃったし、他の所帯持ちは最初から声掛けられてないしね」

三人で並んで歩いて居酒屋に向かう。
「良かったわ。私だけが長老じゃ、ちょっと居づらいもん。一次会で引き上げるつもりだけど」
水元の言葉で、俺も二次会までは付き合わなくて良いだろ、と思ったら、少し気分が楽になった。
「ところで、今日の会費いくら？」
「参加って言ったのに知らないの？」
水元が驚いて俺の顔を見上げた。
「それどころか、どこでやるかも知らない。俺、参加なんて言ってねーもん」
「俺、さっき下田さんから、長谷部さんが参加って聞いたんですけど」
糸川がそう言うと、水元は少し複雑な顔をした。
「下田さんが長谷部君を、参加させたかったってことかしらね」

3

居酒屋の中は、既にざわめいていた。
糸川はあっさりと中央の席に呼ばれ、俺と水元がはじっこに座ろうとした時、奥から声がかかった。
「長谷部さん、こっち空いてます。たまには真ん中に来てくださいよぅ」
見ると一際若くて華やかな一角で、それだけで俺の居場所は皆無だ。
「いや、ここで」
そう言いながら、詰めてもらって水元の横に腰を下ろす。
隣の席と形だけの乾杯をして、小皿と箸を回してもらって、近くの会話を聞く。

社内の人間だけで飲んでいるのだから、話題は社内の噂話とプライベートの話半々だ。
水元はちゃんと話についてってるし、時々後輩の大間違いを訂正したりしてる。
最近では、萩原がちょっと前まで経理に居た子とつき合ってるってのが旬の話題で、少しスキャンダラスな扱いだけど、当の萩原が口を噤んでいるので、それに尾鰭がついてたりする。
「いいんじゃない？最近、萩原は前よりも落ち着いてるし、他人のこと考えるようになったよ」
「同情につけ込まれちゃったんじゃないの？」
恋愛なんて当人にしか理解できないんだから、放っておいてやればいいのに。

水元が手洗いに立ったとき、その席に下田さんがすとんと座った。
「長谷部さん、なんでこんなにはじっこに座ってるんですか？私、長谷部さんとお話したかったのに」

上目遣いでそんなこと言われても、何を喋っていいかわからない。
大体、なんで俺にそんなに近寄ってくる？
あんたの目当ては俺じゃないだろうよ。
「長谷部さんって、お休みの日とか、何してるんですか？」
「寝坊して、洗濯して、テレビ見てるかな。たまに、映画見に行ったりはするけどね」
「映画って、どんなの見るんですか？私、最近映画なんて見てないですー」
聞かれたことに返事をしているだけで、会話になんてなってない。

「長谷部さんって、生田さんと一緒の部署で、大変ですよねえ」
「いや、あの人は仕事がきっちりしてるし、現場で頼りになる人だよ」
下田さんは顔を顰めた。
「長谷部さんって本当に優しいんですね。私、あんな風に文句ばっかり言う人、きらい」
優しいんじゃなくて、本当に生田さんは知識が豊富で、仕事は几帳面なんだって。
「長谷部さんの彼女って、幸せでしょうねえ」
「いないよ」
「えー？じゃ、私、立候補していい？」
はい？何に立候補だって？ずいぶん調子良いことを言うもんだ。

4

水元が戻っても、下田さんは移動せずに俺の横に居続けた。
喋るテンポが俺の二倍早いんじゃないかと思うんだけど、一生懸命にこっちに話題を振ってくるから、応えないわけにも行かない。
一言二言答えると、話題がまわりに移っていき、俺についていけないハイテンションで話が展開する。
そして勝手に盛り上がって行き、最後に戻ってきたときには、まったく別の話になっているのだ。
酒の席なんだから話題がよれるのは当然だけど、それに相槌を強制されるのは、ついていけない人間には結構苦痛だ。
どうにかこうにか笑った表情だけ作ってるけど、時々「どう思いますぅ？」なんて、隣の席から顔を窺われるので、全然気が抜けない。

下田さんは確かに可愛いし、下世話な話、持ち帰るかと聞かれたら、身体だけなら持ち帰りたいかも……なんてことを考えてると、余計に話題に乗り遅れ、そこを笑われたりする。
「長谷部さんって天然ボケ。おもしろーい」
何かを誤解している下田さんが隣で身体を捩ると、ミニのスカートの裾が乱れて、思わず目を逸らした。
「二次会は、カラオケでデュエットしましょうよ」
「いや、俺は二次会はパス……」
「行きましょうよ。連行！」
ぐいっと引かれた腕の中ほどに、柔らかいかたまりがむにゅっと押し付けられた。
それね、オジサンには刺激強いです。

居酒屋から出て、二次会に不参加の面子と一緒に駅にとっとと向かう。

「長谷部さん、今日はずいぶん楽しそうでしたねえ」
いや別に、いつも通りだったけど。
ただ、話にはずいぶん参加していた気はする。
ちんぷんかんぷんではあったけどね。
そういう意味では、下田さんに少し感謝しなくてはならないかも知れない。
腕に当たった胸のふくよかさとは、また別問題としてね。

いつの間にか隣を歩いていた水元が、ちらっと俺の顔を見上げる。
「下田さん、ずいぶん懐いてたねえ」
「ん？ずいぶん酔っ払ってたみたいだったね。なんかテンション高い子だよなあ」
「惚れられちゃったんじゃないの？」
「俺に？まさか。ひとまわり上だぞ」
地味なパンツ姿の水元は、不思議な顔で笑っていた。

5

「なんで二次会に参加しなかったんですか？カラオケ、大盛り上がりだったのに」
月曜日の通路で、また下田さんに声をかけられた。
「最近の歌、わかんないから。若い子ばっかりで行ったんでしょ？」
「そんなに新しい歌ばっかりじゃありませんよう。今度、一緒に行きません？」
二十代前半の「古い歌」は、三十代半ばには「最近の歌」だったりするんだ。
「あんまり得意じゃないからね。楽しくて、良かったね」
下田さんのヒラヒラしたスカートは、膝頭の覗く長さだ。

「あれ？今日は内勤ですか？」
萩原に声をかけられて、やっと下田さんが横を離れる。
女の子大好きでマメな萩原は、どうも下田さんが気に入らないらしい。
下田さんもそれを理解してて、開発営業部にはあまり近づかない。
尤も、開発営業部で独身なのは、萩原の他には、奥方を早くに亡くした五十過ぎの次長だけだけど。
「午前中にちょっと設計して、午後から現場。萩原は？」
「俺はこれから、フォレストハウスです。担当の人が几帳面だから、早めに行かなくちゃ」

席に戻ってＰＣを開けたら、営業推進室からメールが届いていた。
翌日に設計事務所と施主を交えて打ち合わせ会をするので、出席しろという。
課長に報告して、現場との兼ね合いの指示を仰ぎ、午前中はバタバタと過ぎていく。

早めに昼飯にして出掛けようと、作業着に着替えてロッカールームを出たら、水元にぶつかりそうになった。
「おや、現場？行ってらっしゃい」
設備施工部の派遣さんは、「派遣先の会社では人間関係をつくりませーん」って感じの人だから、女の声で「行ってらっしゃい」なんていうのは、滅多に聞かない。
「今日は外が暑いから、脱水しないように気をつけてね」
はいはい、ということを聞いて、外出する。

水元とは入社研修から一緒で、特に何かのかかわりがあるわけじゃなくても、なんとなく「同志」な気分だ。
結婚式のウエディングドレスは綺麗だったけど、その一年後に疲れた顔で出社していた時も、俺は何もしていない。
仕事に支障をきたすこともなく姓が以前に戻った時も、特に原因を聞いたわけでもない。
あくまでも同期の括りの中の仲の良さで、男と喋るのと変わらない。
ただ、他の女の子と気安く口が利けないだけなのだ。
だから現場から会社に戻った時、下田さんから言われた言葉に驚いた。
「水元さんと話してる時って、楽しそうですよね」

6

……楽しそう？普通だぞ。

「そんなことはないと思うんだけど」

「ううん、楽しそう。私も長谷部さんと楽しくお喋りしたい」

ひとりくらい喋る相手が少なくたって、下田さんは不自由しないだろうに。

「長谷部さんって飲み会にもあんまり来ないし、仲のいい糸川さんとなら、一緒に来てくれるかなあと思ったのに」

糸川とは別に特別仲がいいわけじゃなくて、仕事絡みで教えることが重なってただけだ。

会社の通路で立ち話ってのも、なんかちょっとヘンな感じ。

しかも、特別な話題はないのだ。

下田さんは帰るところらしく、化粧を綺麗にしてバッグを抱えてる。

俺じゃ絶対歩けそうもない、華奢な踵の靴を履いて、これじゃ電車は大変だろうなと、妙なところに感心した。

「ま、お疲れ様。また明日」

とりあえず場を離れようと、帰りの挨拶をする。

「お先に失礼しまーす。残業、頑張ってくださーい」

うーむ。残業、別に頑張りたくはありません。

席に戻ったら、また生田さんが怒っていた。

「この見積、継ぎ手が断熱の価格じゃねえ！誰だ、これ入力したの！」

女の子に頼んだだけで、まだチェックもしてない。

「おまえの物件だろ？まだ提出してねえよな？俺が気がつかなきゃ、そのまま提出してたろ」

そんな間抜けじゃないつもりだけど、抜けがないとも言い切れない

ので、素直に受け取っておく。
生田さんから見れば、設備施工部で唯一年下の俺は、多分いまだに指導対象なのだ。

見積書を見直して、設計をもう一度チェックし終えると、八時になっていた。
「お疲れ様ー」
パーテーションから水元が顔を出し、残っている面子にクッキーだかなんだかの缶を差し出した。
「昼間の戴き物。女の子だけまわしたんだけど、ちょっと残ってるから、残業チームで食べませんか？」
「お、水元さん、頑張るねえ。経理も忙しいの？」
課長の声掛けに、水元が答える。
「派遣さんばっかりだと、チェック業務に結構追われるんですよ。一般職でいいから、正社員入れてくれないかなあ」
派遣社員には決裁権が与えられないので、判断は全部正社員の仕事になる。
現在の経理部は、管理職の他に、水元の下に一般職の女の子がひとりと、派遣社員ふたり。
「前年度は、見るだけで済んでたんですけどー」
つまり、訂正があるってことだな。
そして、前年度から変化したことといえば、派遣社員が萩原の彼女から、下田さんになったってこと。

俺に内勤の仕事はわかんないけど、間接部門なりのドタバタはあるんだろうな。
「毎日綺麗な格好して座って、給湯室でさぼってばっかり」
少なくとも、そう揶揄されるようなバカＯＬは、そうそう見当たらない。
「さて、もうひとふんばり」

そう言いながらパーテーションから出て行く水元は、左手で自分の
右肩を揉み解していた

1

営業推進室の山口と一緒に、客先に打ち合わせに出向く。
打ち合わせって言っても、折衝するのは山口のみで、技術的な質問や建築や設備の設計と空調の設計のすり合わせのために同行してるわけだ。
それにしても、と、山口の顔を見る。
俺より下のクセに、室長代理で話を進めるだけあるな、こいつ。
相手の言い分を飲んでるように見えて、実はこっちの都合最優先で話を進めてる。
さわやかにゴリ押しして相手に納得させる手腕を、授けて欲しいものだ。

客先から帰社すると、ちょうど昼休みに入るところだった。
「わあっ！長谷部さんのスーツ姿、初めて見ました。似合うー」
財布を持った女の子集団から、下田さんが抜け出してくる。
……なんだろう、この子。
山口や津田なら確かにスーツは似合うんだが、基本的に作業着の俺は、革靴自体が得意じゃない。
苦笑いした山口が隣をふっと外れて行き、俺一人が下田さんと向き合ってしまった。
「お昼休みですよね。一緒に行きません？」
思わず後退って、首を横に振る。
女の子の集団となんて、どっち向いてメシ食っていいのか、わかんないし。
「やだあ、残念。じゃ、次の機会にまた誘いまーす」
何が「やだあ」なんだか、あのイキオイだと、次にまた声を掛けてきそうだ。

俺に近寄ったって、メリットはないだろうに。
大体、彼女は大きく俺を誤解していそうだ。
はあっと息を吐いて自分のブースに戻り、上着を脱いで財布を持った。
同じことをして通路を歩いてきた山口と、一緒に階段に向かう。
「長谷部さん、狙われてますねえ」
「そんなわけ、ないだろ。やけに懐いてるけど」

本当は、ちょっとそんな気がしてるんだ。
ただ、自惚れた後に当て馬だったってことも、過去に経験がある。
可愛い顔の下田さんは、俺に目をつける必要なんてない。
たとえ仕事ができなくったって、一度お願いしたいって男が山ほどいる筈だ。
だから、本当に「気がする」だけね。

2

「うわ、なんだこの肩、ひっでえなあ。鉄板仕込んでるみてえ」
「デスクの上で丸まりっぱなしだもん。首の後ろも押してぇ」
掌で額を押さえ、首の後ろを掴んでやると、悲鳴が上がった。
「痛い痛い痛いっ！やっぱりもう、いいっ！」
給湯室の狭い空間で、水元は腕をバタバタさせる。
「週末に鍼に行くから、それまで我慢するよぅ」
「鍼？ますますババアか」

「お邪魔しまーすっ」
津田が元気良く入ってきて、自分用のマグにコーヒーを入れている。
「水元さん、また長谷部さんに肩揉ませてるんですか？長谷部さん、力強いんじゃない？」
「いいのっ！長谷部君の指が太くていいのっ！」
「なんか卑猥っすね、そのセリフ」
げらげら笑いあってると、下田さんが水元を、電話だと呼びに来た。
そして俺に、不満そうな視線を投げて出て行った。

「メシ行きません？」
糸川に誘われたのは、その日だった。
「ちょっとまだ、かかりそうなんだよなぁ。悪いけど」
そう断ると、糸川は困った顔になった。
まだ大学出たてで子供っぽい顔の糸川は、そんな顔をすると、やけに頼りなく見える。
「何？困りごとなら聞くぞ？」
そう言うと、他の人に聞こえないように顔を寄せてきた。
「長谷部さんを連れて来てって言われてるんですよ」
「なんだあ？喧嘩でも売られんのか？買わねーぞ」

「いや、下田さんなんですけど」
また下田さんか。
俺のどこが気になるんだか知らないけど、オジサンに興味ありそうな顔をするのは、止して欲しい。
免疫ないんだからね、こっちは。

「後からでも、構わないです。『桂林』に居ますから、終わったら来てくださいね」
出て行った糸川を頭から抜き、しばらく目の前の設計に没頭していた。
腹が減ったと思ったら、八時をまわっていて、キリをつけて帰ることにする。
糸川の言葉は頭の隅を掠めたんだけれど、出て行ってから一時間以上経過しているし、義理を立てる必要はない。
PCの電源を落として、会社を出た。

「あーっ！長谷部さん、仕事終わったんですかあ？」
ロビーを出てすぐ、俺に声をかけてきたのは、下田さんだった。
「忘れもの？」
「違いますー。長谷部さんが来てくれないから、迎えに来たのー」
彼女は酔っていて、俺の腕にぎゅっと腕を絡め、胸を押し付ける。
見た目よりボリュームのある感触に、思わずたじろいだ。
「お仕事中なら、横で待ってて連れて行こうと思ってー」
……女の子を横に座らせて、仕事？冗談じゃない。
酔ってるにしろ、それはあまりにも非常識な申し出だ。
黙っていたら、腕を引っ張って「桂林」とは別の方向へ、引きずられていた。

3

「方向、違わない？」
「バッグ持ってきたもん。長谷部さんが終わるまで、待ってるつもりだったから」
まだ途中なら、合流した方がマシって流れになってるけど。
「どうせ帰っちゃうつもりだったんでしょう。私と飲むの、イヤですか？」
腕には胸が押し付けられたままで、なんだか犯罪チックな気分だ。
「イヤってわけじゃないんだけどね。苦手なんだ、人間が大勢で騒いでるの」
「じゃあ大勢じゃなくて、私だけなら？」
腕にしがみついたままで、下田さんは言った。
だから、胸が当たるんだってば……って、ええっ？

「酔ってるんでしょう？オジサンをからかうのは止めて、みんなのところに戻ろうよ」
言葉だけだと冷静だけど、実はかなりテンパってる状態だ。
こんなにストレートに「気がある」と態度に出されたことはなくて、しかも、よくわかんない子から。
「やです。言ってることの意味がわからないほど、酔ってません」
だから、胸がね、さっきからずっと腕の中ほどにあるわけです、はい。
これを言っても良いものか。

「長谷部さんと、もっと仲良くしたいんです」
「仲は、悪くはない、と、思うんだけど」
ひとまわり下に、しどろもどろだ。
「水元さんより、仲良くなりたいんです」

「あれとは同期だし、別に特別何かあるわけじゃないし」
何イイワケ口調になってんだ、別に疚しいことなんて何もないぞ。
「彼女いないって言いましたよね。私、立候補します」

スケベ心が湧いたのは、否定できない。
この会話は腕に胸を押し付けられた状態で交わされたものだし、ひとりで居るのもいい加減飽きた。
俺を誤解してもなんでも、俺に向かって好意があると言っているのだ。
ちょっと良い気分になっちゃっても、無理ないだろう？
すぐに色よい返事ができるわけじゃないけど、下田さんは顔にも身体にも不足はない。
「前向きに、検討しましょう」
「絶対ですよ！」
ぴょんぴょんと小躍りする下田さんの胸が、腕をこする。
うん、ルックスは悪くないよな。

4

前向きに検討しましょうったって、何があるわけじゃない。
俺は下田さんと一緒に飲み食いしたり、映画を観に行ったりしたいわけじゃない。
確かに可愛いけど、それ以外にアピールしてくるものが見当たらないのだ。
あの後下田さんからは、ずいぶんあからさまな攻撃を喰らうようになった。
それはみんな気がついていて、俺がもてないのも、今彼女が居ないのも知っているから、当然俺が応じるものだと思ってる。
正直、居づらい。

朝の給湯室で、下田さんと目が合う。
「コーヒーですか？お茶？」
自分で淹れるから、大丈夫だってば。
「長谷部さんはお砂糖なし、ミルクだけでしたね」
他の人間が居てもお構いナシの彼女の態度に、ちょっと閉口する。
なんで俺で、どこが気に入った。
本当はそう問い質したい。
だけど、一生懸命アプローチされるってのが、そもそも今迄にないことで、それを切り出す隙がない。

そうこうしているうちに、なんとなく「出来上がる間際のカップル」扱いされはじめ、下田さんは下田さんで、金曜日の夕方に設備施工部に無意味に顔を出す。
これで白ばっくれることのできる男がいたら、それは女に慣れているヤツに違いない。
少なくとも、現状を動かさないことにはにっちもさっちも行かなく

なった気分だ。
「長谷部、お待ちかねだぞ」
生田さんにまで声を掛けられ、帰り支度を始めると、ロッカールームの前に下田さんが待っていた。

「一緒に帰りましょう？」
俺、下田さんがどこに住んでるのか、知らないんだけど。
「長谷部さんって江古田ですよね？私は千代田線だから、この近所で食事が都合いいですよね」
「俺、住んでるところなんて、教えたっけ？」
「総務の人が、言ってました」
おい、総務！個人情報漏れてるぞ！
俺の頭の中に構わず、下田さんは話を進めていく。
「どこか、オススメのお店、ありますか？」

柔らかそうな髪が、ふわっと揺れる。
小さい顔と女の子らしい仕草は、ちょっと庇護感情をそそる。
可愛いし、勘違いでもなんでも、俺に好意を抱いてくれてる。
こんな子を見逃したら、当分彼女なんてできないかも知れない。
流されるがままでも、別に構わない……か。
会社から少し離れた多国籍料理の店で、ただ夕食をとっただけだ。
喋ったのは八割下田さんで、相槌を打った六割は、内容が理解できなかった。
「長谷部さんって落ち着いてて、安心なんです」

5

落ち着いてるわけじゃない、反応が遅いんだ。
何故反応が遅いのかというと、興味の範囲が違いすぎて、ついていけない話を頭の中で噛み砕こうとしてるから。
何度も聞き返して、気分良く喋っているのを遮りたくなくて、曖昧に頷いているうちに、話が変わっていく。
下田さんは終始にこにこしていて、それは可愛らしいんだけど。
結局、何のことはない普段の続きで、やけに疲れが残っただけだった。
社内で「別に好きじゃないけど、一回お願いします」なんて態度をとれるわけじゃないし、俺に対する下田さんの誤解が深まっただけ。

「また、お喋りしてくださいね」
そう言って地下鉄の通路に消えた下田さんの笑顔を思い出し、溜息をついた。
嬉しくないわけじゃないんだ。
こっちからも好意を抱いているのなら、願ったり叶ったりなんだけど、どうもピンと来ない相手なんだよなあ。
俺だって男だから、可愛い女の子は好きだ。
そっちの件に関してだけなら（そっちってあっちだ）、迷わずにおつきあいしたい。
でも、そういうわけに行かないだろ？

翌日の土曜日は思いっきり寝坊して、洗濯だけで終わった。
その翌日も、テレビ見てネットサーフィンしてたら、終わってしまった。
こんな生活が続くんなら、好意を持ってくれる女の子と、とっととどうにかなってしまえ、と自分の声が聞こえる。

もう十年若ければ、迷わずにそうしていたろう。
今の俺には、この先が透けて見えてしまう。
俺に失望して去られるか、食い違いで破綻を来たすか。

結局、可愛い女の子に好意を示されて、喜んでいるだけなのだ。
俺は下田さんの中身に興味を抱いたことはないし、俺自身を見てもらいたいと思ったこともない。
だから、これからしなくちゃならないことは、下田さんとは上手くいかないと思うと、きっぱり伝えること。
そのタイミングを計るのは、俺自身なんだけど。
……苦手だ、それ。
彼女が目を覚ましてくれるの、待っていたいんだけどなあ。
その間にあわよくばってのは、スケベ心でしかない。
そうなってしまっても彼女自信に興味を抱けなかったら、傷つくのは俺の方じゃない。

6

「長谷部さん、今週の土曜日はお時間ありますか？」
下田さんに声を掛けられたのは、水曜日の朝だった。
「いや、特にはないけど」
給湯室でしたい会話じゃないなあ。
彼女は派遣社員だから、任期が終わればいなくなるけど、俺はずっとここにいるのだ。
「じゃ、どこかに行きません？」
ここで黙ってしまうのが、俺の悪いところだ。

「長谷部君、おっはよー」
水元が入ってきて、下田さんは話を打ち切った。
「じゃ、長谷部さん、また後で」
俺もコーヒーを貰って出ようとすると、水元が話し掛けてきた。
「下田さんとつきあうの？」
そう、なっちゃうのかなあ。なんだかずるずると、引き摺られて行くような気がする。
「長谷部君が、振り回されるだけ振り回されそうだね」
今、まさにその自覚はある。

「水元は、もう結婚しないの？」
バツイチなんて珍しい話じゃないし、水元はいいヤツだ。
「うーん。そう決めてるわけじゃないんだけどね。ま、めぐり合わせだから」
ちょっと肩を竦めた水元は、自分のカップにコーヒーを注ぐ。
冷え性の肩凝り、内勤の総合職は少ないから、現場に出ている俺より、責任は重い筈だ。
「いい男、いるといいな」

心の底からそう思う。
離婚の原因は知らないけど、やつれた顔をして仕事していた水元は、知っている。

「長谷部君に心配される筋合いはないの。自分がガンバレ」
オトコマエな仕草で拳を突き出した水元と、拳をぶつける。
若くはないけど、そんなに年を喰ってるわけでもない。
下田さんと一緒に出掛けるくらい、いいか。
俺も彼女を知らないんだから、知ってみる努力くらいしてもいいかも。

「いいよ。じゃ、美術館にでも行ってみる？」
下田さんにそう言ったのは金曜日の朝だ。
「美術館？やっぱりオトナな趣味ですね。いろいろ教えてくださいね」
好きなだけで、別に詳しくはない。
「下田さんは普段、どんなところに出掛けてるの？」
「カラオケとか、ショッピングとか」
うーん。それは俺の行動パターンの中には、ない。

7

下田さんと行った美術館はとても混雑していて、人酔いしそうだった。
ひとりで出る時は混雑する午後を避けて昼前に動くので、それだけで結構疲れる。
「美術館なんて、小学校の社会科見学以来。絵だけじゃないんですね」
下田さんの感想は、絵やオブジェについてではなくて、「美術館」についてだった。
つまり、併設のカフェやミュージアムショップの佇まいについて、だ。
「おうちのダイニングがこんなにシックなら、ステキですねえ」
「ショップなんてあるんですね。雑貨屋よりセンスのいいディスプレイ」
うん、美術館や博物館に興味のなかった女の子なら、当然の反応なのかも知れない。

可愛い女の子が隣を歩いているってのに、一向に上がらないテンション。
仕事の義務で接待してるみたいな気になるのは、職場以外の顔が見えないからだと思うんだけど、オンもオフもこういう子なんだな。
よく言えば裏表なく、悪く言えば深みがない。
素直なんだけど、自分の中に溜め部分は少ない。
若いから、なんて言葉は爺むさいけど、実際にそのギャップは大きい。
「長谷部さん、聞いてます？」
「ごめん、ぼうっとしてた」
だって、下田さんのカラオケの点数が何点だって、聞いたって仕方

ないだろ。

「これからどうします？」

軽い夕食を済ませた後、下田さんが言った。

どうもこうも、俺は帰るつもりだった。

「軽くお酒？それとも、カラオケでも」

「いや、そろそろ帰ろう？駅まで送ってくから」

「また誘ってくれるんなら、帰りますけど」

面白くなさそうな下田さんを地下鉄の入口まで送って、ふうっと溜息をついた。

下田さんは、あれで楽しかったのか？

話が弾んだわけじゃないぞ？ってか、相変わらず意味がわからなかったぞ。

チェックの半袖シャツから出た自分の腕を、無意味にさすってみた。

贅沢を言える立場でも、イキオイで恋愛できる年齢でもないんだ。

だからって、手近に懐いてきた女の子とどうにかなろうなんて、相手に対して失礼じゃないか。

二度目はないことにしよう。

下田さんがどう考えていても。

8

「土曜日は、ありがとうございました」
月曜日の朝、にこにこしながら下田さんが言う。
「あ、いや、どうも」
こんなタイミングで、「次はありません」とは、とてもじゃないが言えない。
こうやってどんどん、タイミングを逃していくんだ。

営業開発室の山口が、珍しく作業ジャンパーを着て、一緒に現場に来るという。
「山口、作業着似合わねえなあ」
「長谷部さんが似合いすぎるんですよ。ザ・現場の人」
作業着がやけにハマっているのは、自覚している。
我ながら、現場仕事自体が向いていると思うし、俺には事務も営業も無理だ。
ヘルメットを抱える山口を、横目で見る。
整った顔と長い足は羨ましいが、こいつの外見で俺の中身なら、アンバランスこの上なし、だ。
グズグズした性格じゃあない筈だけど、「打てば響く」とは言えない。
まあ、ごつごつした外見に、ごつごつした中身が入ってるだけのことだ。

遅くなって現場から帰社すると、給湯室で水元がおかしな動き方をしていた。
「何してんの？」
「腰痛体操」
痛いときにそんなことをしても、すぐには治らないんじゃないかと

思う。
「目の疲れが肩に来て、肩から腰に来るの」
そして、当然のように俺に肩を向けた。
「なんだ?俺は水元の専属マッサージ師か?」
「いいじゃなーい。女の肩なんて、滅多に触れないでしょ?」
襟に手を突っ込んでるんならともかく、服の上からじゃときめかない。

「下田さんとデートしたんだってねえ」
世間話のように水元が言う。いや、世間話か。
「早いな、土曜日の話だぞ」
「ロッカールームで下田さんが、はしゃいでたもん。仕事もあれっくらい熱心になってくれるといいんだけど。さて、さんきゅ。もうちょっと仕事してくわ」
水元は独身だから、遅くなっても誰も気にしない。
「水元、ひとり?」
「課長がまだ残ってる。大丈夫だよ、煮詰まってないから」
笑った顔は、相変わらずのオトコマエだ。

1

女の子に向かって怒鳴るなんて、萩原らしくないじゃないか。
しかも相手は一般職とは言え、萩原より2年先輩（つまり、同じ年）だ。
口を突っ込むつもりはなかった。
泣きそうになっている経理の女の子に、俺も用事があったから、ということにしておく。
「ねえ、指定請求書の送付先に、ウチの打ち出しの請求書が送付されてるみたいだけど」
そう割り込んだら、萩原の怒りはその部分だった。

説明しておくと、エア・トラッドの打ち出しの請求書っていうのは、基本的に打ち込んだ売上がすべてアウトプットされる。機器販売だけなら、別に何の問題もない。
問題があるのは「工事一式」だの「コミッションのあるもの」、もしくは客先が請求形式を指定している場合だ。
「工事一式」で請け負っているのに、売り上げとしては細々と人工代やら材料代やらと計算しているので、それを相手に見せたくなくて、営業からの申請で、別の書式に変更する。
「申請書、わざわざ手渡して念押しただろ。うるさい会社だからって」

「ごめんっ！ちょっと会議室に入ってっ！」
割り込んできた水元に、三人とも会議室に押し込まれて、半泣きの経理の女の子は水元の隣に座った。
「明日、各担当者と客先に、課長からお詫びの連絡するところだったの。偏に私の指導力不足っ！申し訳ない！」
両手を合わせる水元の、言外の意は理解できた。

今までなかった頻発するトラブルの原因は、アレだ。
一緒に手を合わせる女の子に、萩原も怒り続ける気は殺がれたらしい。
「派遣、交代しないんすか？」
その代わりのように、辛辣とも言える言葉が出た。

「ここだけの話、今、派遣会社と折衝中。条件だけは、派遣会社に依頼通りなの」
主語のない会話なのに、誰の話だか全員が理解してる。
「決定じゃないし、本人も知らないから、口外無用よ。特に長谷部君」
いきなり名前を呼ばれて、驚く。
「ピロウトークでも、止めといてね。私も今逆上気味だから。自分の指導力に、自信なくなったわ」
ピロウトークってね、そんな関係じゃないんだけど。
経理部二名が会議室を出て行き、萩原は盛大に溜息をついた。
考えてみれば、こいつの彼女は前年度経理の派遣社員で、問題が多くて契約更新しなかったのだ。
水元も、気が休まる暇がないだろう。

2

翌日、各部署に経理課長から詫びが入り、ぐずぐずと文句を言う営業に、水元が頭を下げて回った。
落ち込んでるかなと思った下田さんは、コトの重大さがわからないらしく、普通の顔でロッカールームに出入りしている。
派遣社員交代の話を派遣会社から聞いたら、多分驚くんだろうなあ。
そんな気がする、木曜日の晩。

「長谷部さん、今帰りですか？」
ロビーで後ろから声を掛けられ、驚いて振り向くと、下田さんだった。
「あれ？月末以外で派遣さんが残業？」
「怒られてたんです。勘違いしちゃってて、誰もチェックしてくれないし」
「……派遣、三ヶ月目だよね。先月にやったこと、メモにしてないの？」
「してたんですけど、マニュアルも作ってくれてないし」
マニュアルにするほど大層な業務じゃなければ、口頭の指示で済ませているんだと思う。
「……大変だったね」
本当に大変だったのは、経理部の他の面々だったと思うけど。

「だから、しょげてるんです。帰り間際に長谷部さんに会えて良かった」
にっこり笑う下田さんに違和感を感じながら、地下鉄の入口横のコーヒーチェーンに誘導される。
「ちょっとだけ、愚痴聞いてもらいたいなー、なんて」
半泣きの経理の女の子と、鉄板を仕込んでいるような水元の肩が、

ちらっと頭の隅を掠めた。
「私、派遣先チェンジしてもらおうと思ってるんですよ。正社員の人たちは何も教えてくれないし、同じ派遣の筈なのに、私じゃない方の人とばっかりランチとか行くし」
もうひとりの派遣さんは、今年で三年目だから、それだけ気心も知れてるんじゃないかと思う。

「水元さんなんて、私が長谷部さんとデートしたからって、冷たいんですよ」
「俺？」
思わず、声が出た。
「水元さんって長谷部さんのこと、好きじゃないですか」
「それは、違うと思うけど。そりゃ同期だから、他の人より話すことは多いよ？でも」
突拍子もない妄想だ。俺と水元は、そんな間柄じゃない。
「一回結婚してるんだから、遠慮して欲しいんですけど」
なんだ、そりゃ？

3

どう否定しようかと考えているうちに、下田さんの愚痴は発展していく。
「いつも忙しそうだから、わかんない処理を聞くのも悪いかなーと思って、こうだろうって処理すると、違うって怒られるし」
「わからない処理の質問しても、怒られないでしょう」
「だって、先月教えたでしょ、とか言われて」
ああ、頭を抱えた水元が浮かぶ。経理の処理に曖昧が許されないのは、俺だって知ってる。
「下田さん、専門職派遣だよね？」
「そうです。ビジネススクールで、経理の勉強しましたから」
そうか、条件は合ってるって言ってたな。

派遣先が交代を希望していて、派遣社員がそうしたいと言えば、それでＯＫなんじゃないかと思うんだけど、契約の中には色々あるのかも知れないので、俺には何も言えない。
「派遣先変わっても、長谷部さんには会いに来ますから」
「ええっと」
「今週末、どうします？」
「えええっと」
なんだか考えが纏まらないうちに、週末の約束に巻き込まれる。二度目はない、どころの話じゃない。

「下田さんくらいの子から見て、俺ってどんな風なのかなあ」
俺からすれば当然の疑問なのに、下田さんはけらけらと笑った。
「頼り甲斐があって、落ち着いてて。オトナだなーって感じ」
すっげー誤解。
俺が落ち着いて見えるのは、俺の代わりに誰かが主張してくれるか

らだし、中も外も十年前と大して変わってない。
「俺ね、昔っから年寄り臭いって言われてたんだけど」
「昔からオトナっぽかったんですか、いいなあ。私なんて落ち着きなくってぇ」
物は言いよう。

勝手に喋って勝手に機嫌を直して、下田さんが帰っていく。
悪気はないし、可愛いんだよな。
だからつい、週末の約束をしちゃったのだ。
にもかかわらず、相変わらず下田さん本人への関心なんて、全然抱いてない。
これでも彼女は、満足なんだろうか。

4

「えええっ！今日も帰っちゃうんですかぁ？」
昼過ぎに待ち合わせて映画を見て、更に夕食も済んだ土曜日の晩。
「明日も休みなんだし、もうちょっと遊びましょうよ」
俺の腕にぎゅうっと巻きつく細い腕。
だからね、そうすると、胸がそのまま押し付けられるんです。
「遊ぶって言っても、俺は夜の遊び方なんて」
「お酒飲みましょう？ね、もうちょっと」

止しとけよ、そう頭の中で、自分の声がする。
こんな状態で女の子に誘われたら、のっぴきならないことになるぞ。
その気なんて、全然ないくせに。
腕に感じる胸は、なんだかそのままベッドに直行許可みたいで、ヘタな妄想をしそうだ。
このまま酔わせてやっちゃおうかな、なんて不埒なことを考える程度には。
たとえば萩原あたりなら、遠慮せずにいただいちゃうんだろう。
ダメだって。俺はそんなに器用じゃない。

「下田さん」
今だ、今なら次はないって言える。
「はいっ！」
お預けを解かれたワンコロみたいな顔で、良い子のお返事をする下田さん。
「……送って行けないから、遅くなったら危険でしょ？」
誰か、俺の阿呆を怒鳴ってくれ！
「私の家、大通り沿いですから、そんなに怖くないんですよ」
「女の子が夜中にひとりで歩かない方がいい」

うーわっ！分別&オヤジ臭い、良い人発言だ。どの口がこんなこと言ってる！

「わかりました。来週にします」
口を尖らせた下田さんが頷く。
待て待て待てっ！誰が来週約束した？
「月曜にはまた会えるんですもんね」
いや、普通に仕事に行くだけなんだけど。俺は、阿呆だ。
「来月、お誕生日でしょう？どこかに行きます？」
総務！総務！個人情報は！
「とりあえず、おとなしく帰ります。おやすみなさい」
地下鉄の入口に消える下田さんを、呆然と見送る。
なんだかもう、話が「つきあってる人たち」だ。
手を出そうが出すまいが、そんなことは関係ないらしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2394y/

行灯の昼

2011年12月11日23時52分発行